

「ウグイス嬢の困惑」

—修正稿—

2025/07/20

しののめ ののの

〈人物表〉

吉田 三奈 みな

(25)

フリーター

松野 和美

(35)

ウグイス嬢バイト

下田 信之 のぶゆき

(47)

選挙カーの運転手

長曾我部 秀雄 ひでお

(58)

某市の市議会議員候補

1.

市内・公道（朝）

晴れたのどかな街中を、選挙カーが走っている。一般的な四人乗り乗用車に、「長曽我部ひでお」という看板とスピーカーを搭載しただけのちゃんもの。スピーカーからは、吉田三奈（25）の声。

三奈 「子育て支援を充実させます。長曽我部秀雄、長曽我部秀雄でございます」

選挙カーが信号で止まる。下田信之（47）の声。

信之 「この信号長いから、一旦止めようか」

2.

選挙カー・車内（朝）

助手席の三奈、頷いて手元のハンドマイクをオフにする。ホチキス留めされた数枚の原稿も持っている。運転席には信之。後部座席には松野和美（35）が座っている。

女性二人は揃いのジャージと白手袋を着用している。

信之 「うん、良い感じだね。初めてとは思えない」

三奈 「（緊張しつつ）あ、ありがとうございます……」

信之 「長曽我部さんの知り合いだったっけ？」

三奈 「いえ、父の知り合い伝手に紹介されました。でも、政治のこととかあんまり知らなくて」

和美 「私も。息子が幼稚園行ってる間のバイト感覚的な」

信之 「そっか。まあ市議会議員選挙だし、猶更よく分かんないよね。とりあえず、今みたいな感じで読んでくれたら」

女性たち、緊張した様子で頷く。

3.

市内・公道（朝）

信号が青に変わり、選挙カーが発進する。

4.

選挙カー・車内（朝）

三奈、原稿を見ながらアナウンスを続けている。

三奈 「住みよい、平和な町にします。長曽我部秀雄、長曽我部秀雄でございます」

三奈、原稿を捲る。次頁を読みかけて、眉を顰める。

三奈 「……これも読むんですか？」

信之 「これって？」

三奈 「この……具体的な政策のところ……」

信之 「あー、勿論。ほら、住宅街に入ったから。まさに今だよ」

三奈 「……分かりました」

三奈、躊躇しつつもアナウンスを続ける。

三奈 「……**にここふれあい動物園の入園料を無償化します。**

長曽我部秀雄、長曽我部秀雄でございます」

信之 「（小声で）やっぱ子育て世代に優しいんだよねー」

和美 「（渋い表情かつ小声で）動物園かあ……」

三奈 「五人目のお子さんご出産で、青森旅行をプレゼントします。長曽我部秀雄、長曽我部秀雄でございます」

信之 「いいなあ〜」

和美 「いや五人は無理でしょ……てかせめて青函トンネル越えろよ」

三奈 「優しく平和な町づくり。それこそが温かな町おこし。長曽我部秀雄、長曽我部秀雄でございます」

和美 「……は？」

信之、笑顔で何度も大きく頷いている。

不意に車外から野次が飛んでくる。

男性1 「どういうことだ。もっとまともなことを言えよ」

一同が車外を見ると、市民が数人集まってきている。

女性1 「何が子育て支援ですか。子どもが起きちゃうでしょ」

男性1 「長曽我部は居ないのか？（三奈に向かって）あんた、

そんな公約読んで恥ずかしくないのか？」

三奈、狼狽える。

男性2 「いや長曽我部さん頑張ってるだろ。野次馬は帰れ」

女性1 「はあ？ アンチには意見する権利もないんですかあ？」

男性3 「子育て政策だって打ち出してるのに何が不満なんだよ。

嫌ならこの町を出てけ」

女性2 「長曽我部さんかっこいい〜」

人が増えてきて言い争いになり、騒ぎになる。

和美 「……この町、やば」

三奈 「（戸惑いつつ）熱意のある御言葉、ありがとうございます」

す。ご意見をしっかりと受け止め、精進して参ります」

5. 長曽我部の選挙事務所・外観（昼）

こぢんまりとした古い建物に、「長曽我部ひでお」と書かれた看板やポスターが掲げられている。建物の付近に、選挙カーが停まっている。

6. 長曽我部の選挙事務所・内観（昼）

三奈が事務所の隅でコンビニおにぎりを食べている。アナウンス原稿を見つつ露骨に苦々しい顔をしていると、信之が話しかけてくる。

信之 「もう一人の人、早退だって」

三奈 「えっ……？」

信之 「急に体調悪くなったって。申し訳ないんだけど、午後は俺たち二人だわ。よろしくね」

三奈 「えっあの、ちよつと……」

信之、そそくさと離れていってしまう。

三奈、再度原稿を見て、思いきりため息を吐く。

7. 市内・公道（昼）

曇り空が広がっている。

走る選挙カーの助手席から、長曽我部秀雄（58）が異様に爽やかな笑顔で手を振っている。窓を開け、身を乗り出さんばかりの勢い。

8. 選挙カー・車内（昼）

三奈、後部座席でぼかんとしている。

三奈 「（信之に小声で）あの、私たちだけの筈では……？」

信之 「急遽スケジュールが変更になったそうです。突然だけど、この後、さくらざか公園の前でミニ演説をやります」

三奈 「ミニ演説？」

信之 「と言っても、候補者の傍に立ってるだけで良いから」

長曽我部、やたら笑顔で後部座席を振り返る。

長曽我部 「よろしくね」

三奈 「は、はい……」

三奈、手元の原稿を見てから、思い切ったように、

三奈 「あ、あの……お尋ねしたいことがあるんですけど……」

長曽我部 「何ですか？」

三奈 「その……長曽我部さんの政策って……」

信之 「（被せ気味に）あつ長曽我部さん、子どもが手振ってる」

長曽我部 「おお」

長曽我部、慌てて向き直り、窓から笑顔で手を振る。

三奈、急いで手元のハンドマイクをオンにする。

三奈 「可愛らしいお子さま、ありがとうございます。長曽我部

秀雄、頑張って参ります」

険しい顔をする三奈の傍の窓ガラスに、水滴が付く。

9. さくらざか公園・入口付近（昼）

結構な勢いで雨が降る中、レインコート姿の長曽我部が、マイクを手に熱弁している。

長曽我部 「ですから、私はこの町をもっと強くしたい。新宿や心

斎橋をけん制し、大都市の脅威から皆さんを守っていく。

私はこの町の『お父さん』になりたい！」

男性2 「そうだそうだ。他の町には負けない！」

男性3 「名古屋と博多はディープステートに汚染されている！」

女性2 「長曽我部さんかっこいい〜」

少なくとも数人の市民たちが熱狂している。

長曽我部の傍には傘を差した三奈。手には原稿を持

っている。目が死んでいる。

10. さくらざか公園・入口付近（夕）

市民たちがだらだらと散っていく。信之が撤収作業をする中、長曽我部が三奈に話しかけてくる。

長曽我部 「いやあ、ありがとね」

三奈、死んだ目で辛うじて頭を下げる。

長曽我部 「（空を仰ぎ）晴れてきた。タイミング悪いな」

長曽我部、軽く笑う。

三奈 「……あの」

長曽我部「何でしょう」

三奈「……なんであんな……変わった公約なんですか？」

長曽我部「変わった公約？」

三奈「青森旅行とか……いや、さっきのお父さんがどうか」

長曽我部「ああ」

長曽我部、けらけらと笑う。

長曽我部「どうせ迷惑がられるなら、面白い方が良いかなと思っ
て。聞いている人が笑顔になれたら良いなって」

三奈「え、笑顔……？ てことは……公約は？」

長曽我部「実現するよ、きっと」

三奈「……本当ですか？」

長曽我部、にやっと笑う。

長曽我部「うん、きっとね。実現できるとは言っていないけど」

長曽我部、爽やかにウインクして選挙カーへ向かう。

三奈が唾然としていると、信之が近づいてくる。

信之「今日一日やってみて、どうだった？」

三奈「……もっと勉強しなきゃダメだなと思いました」

信之「勉強？」

三奈「……政治のこととか」

信之「あーなるほど、いいねー。明日もシフト入ってるよね？」

三奈「……はい」

信之「今日良い感じだったし、明日もよろしくね。もう一人の
人も来れなそうだし」

三奈「……」

三奈、少し俯いてから、異様に爽やかな笑顔を作る。

三奈「……はい」

手元では原稿を握り潰している。

おわり